連結して起居自由、法服着換の嚴儀あり、大師が嵯峨天皇への御自作であるとなつてゐる。恰かも現行の親友との別れに際して自の小照を與へ置く風習に似かよいたる事情であるが眞實如何のものだらうか。衣換の式は、高野山の廟窟御衣換の式に範を取つてのことであらう。尊影の撮影は絶對にできぬことになつてゐるとかにてこゝに紹介することのできぬのは遺憾である。

これも異樣の大師尊影として知りおく必要があると思い紹介することにしたのである。

八、横向大師（又は萬日大師といふ）（圖版二十四）

高野山高祖院（現今三寶院）と千手院谷觀音堂に奉安されてゐる。

觀音堂の木彫坐像は御長け二尺七寸五分、襞幅二尺六寸五分、顏面たけ八寸七分、左の方へ横に向ひ、普通大師の構圖、足利初期の優秀なる大師木像としての作品である。大師木像の作品として優秀なるものには大和吉野郡大藏寺にあるものは鎌倉時代のものとせられてゐるが今この横向大師の作品も大師木彫像としてはかなり古い部に屬するのである。

ところでこの横向大師とは、お顏だけ斜めに横に向かれてゐて異樣なのである。この横向がそも〳〵横向大師としての因緣物語りをなしてゐる。

高野山古志の傳にこの大師につゐての語り草がある。それは、昔二階堂高祖院といふ宏大なお寺があつて名僧智識の住持がおられたために、諸國より笈を負ふて登山して修學する人は雜僧より上は、ひとかどの住持でも雲集して法談論議宗義の研鑽が盛に行はれ、ためにその會下（高野山では修行の坊さんの居るところを會下といふて只今の寄宿舍と同樣で寺の門長屋である）には澤山の僧侶がいたのである。

かゝる修行僧のうちには、國元より學資をみつがれて思ふがまゝに勉學修行のできるのもあつたが、なかには貧乏でお寺の御厄介になつて勉强する貧僧もかなりあつたことは、今も昔もかはらぬ事柄であつたらしい。

山内にても有數なる名僧智識の居住寺であつて、輪奐の美は、眞俗二諦のもの完備せざるなき有樣であつたからして雲集の龍象によつての朝暮の勤行、梵唄の聲

は、密林をゆるがしたものである。

ところが朝暮の勤行のあるごとに會下僧たる一人の顔の見へぬ者があるために、住持は、居間に呼びよせて勤行に出仕せぬ罪を咎めたのである。

その時に會下僧の曰くには、勤行に出仕する考へは充分にあるのでありますが御承知の通り貧乏である故に、その資糧をうるために、勤行は出仕致しませねど一生懸命に聖教の清寫をやつてゐます、その筆工料を得て只今以上に勉強致したいのでありますと答へたが、名僧智識たる住持ではあるがそれはそれとしても他の所仕僧に對してでも朝暮の勤行には是非出仕せねば他のみせしめにもならぬから出仕すべしと嚴命したのである。それ故にお寺に厄介になつてゐる、みじめさは山主の嚴命であるから致方なく、勤行に出仕したのである。

すると不思議や今まで正面にお向きになつてゐたお大師様は横を向ひて會下に寫經してゐた小僧さんの方のみに御向きになつて讀經してゐる衆僧の方にはおむきになつてゐなかつたのである。

これを見たる住持を始め、なみ居る衆僧は非常に驚ひて、仔細を尋ねたらかく

かくの次第とわかり、各〻懺悔慚愧したといふことであると、それより横向大師として尊崇せられるのであるとのこと。致方なしに勤行にいでる住持に叱かられるから心にもなきお經を讀むのであつたが住持より事實叱られた會下僧の人は、眞實に一心不亂寫經の心讀行の身業にお大師様は慈悲の御心をおよせになつたものとの〝ことが〟わかつたのである。

この物語りは、現在吾等お互によい誨誡を寄與してゐるものであると思ふ。

形式にとらはれた、心にもなき空虛なる讀經、空ら念佛よりも小なりとも眞摯なる信仰より迸る一遍の呪文は、くだらぬ長行の觀行よりもありがたきものぞ、空ら念佛は、決して納受すべきでなく、横向〳〵とのことを誨へたる物語りである。

人生生活處生上に於ける事象は、身讀行でなければならぬ、心にもなき空ら念佛ではならぬ、一歩々々を踏みしめてかゝる勤行でなくてはならぬといふ戒めより起つた大師である。所謂なまくらものを攝化せんとして顯はれたお大師様である。

九、見返大師

傳說より描寫されたる影像

これは、四國八十八ヶ所靈場、伊豫國にある、聖蹟中に於ける物語りである。

自分は大正十年晩秋、四國聖蹟巡拜の砌り、初めてきゝ得たるところ、菅だ峻坂の中頃に一つの大杉あり大師このところまでよぢ登りし時にふりかへりて辿り來りしみあとをふりかへり見させ給ひしよりこのところの庵に奉祀せる大師を見返り大師といふと丈けのことであつた。

大師は普通木彫の大師像であつたが木彫としてはつまらぬものであつた。

菅だ論語に「日に三省す」とのことゝ思ひ合はして大師様も吾れ〳〵お互だちが日々夜々の行業に對して反省自察せねばならぬことを戒めんがためになされた一本誓が見返大師として傳へられて尊崇され、四國靈蹟に芳躅をとゞめたのではあるまいか。四國靈蹟の道中筋にある一少部分にのみ於ける見返大師ではなくて、人生百般の事象に於ての見返大師であると同時に、吾等も、吾等の行業に付ては、ふりかへり〳〵見る省察の精神を忘れてはならぬとの廣い意味での大師であらうと思ふ。

十、肺大師

これは四國靈場たる阿波國海部郡日和佐町藥王寺の本堂の後山に奉安せる大師である。

同寺四國靈場二十三番の札所で寺前に藥師溫泉があつて四時參拜者が非常に多い。いま同寺略緣起には、この肺大師に付て左の如く記してゐる。

「當山本堂の裏に世に肺大師と稱する弘法大師の古い石像が安置せられ其臺の下の巖穴から透明な甘露水が滾々として四時たえず湧出してゐる、茲に德島市に寵職の橋本五郎藏といふ(大正二年)七十一歳になる老翁がありまして曾て靈夢を見ること度々であるから常に不思議に思うて居りましたが或時さる老人より藥王寺の肺大師の靈驗顯著にましますことの由來を聞いて見ると曩にたび〳〵見た所の靈夢とよく符合して居ました、扨て明治二年の春始めてわざ〳〵參詣し御水を小い德利に頂いて持ち歸り醫師が匙を投げて九死一生の肺病患者三五の者に頂かせましたら不思議なるかな一週間もたゝぬ中に全快し、學士博士等を大に驚

傳說より描寫されたる影像

歎させたので爾來あちこちより之を聞き傳へ翁の許に御水を受けに來り御利益を蒙つた者其數幾人なるかを知らず云云」との肺大師の利益廣大を說明してゐるがその尊影普通の樣式と大差がない。たゞ袈裟念珠の樣式がくづれてゐて普通大師のものと全然異なつてゐて如何にも尊影の樣式に無頓着で市井の工匠によつて畫かれたことを如實に示してゐるのは如何のものだらうかとの印象を深くすることである。

このほか和歌山市覺樹院には「含利ふきの大師」といふがあり、石川縣鳳至郡瑞穗村には「隱居大師」といふがあり、高野山中には、弘法大師と影向明神對向の圖樣があり(圖版三一)四社明神を畫面の四隅に繪がき普通大師を中央に繪がきたる大師明神圖樣がありなどしてその人々の信仰對象として任意に案出構圖した圖樣が巷間に澤山に流布されて信仰上の或一部の對象を有してゐることを知つて置く必要のあることを附記しておくわけである。

十一、子安大師（圖版三十二）

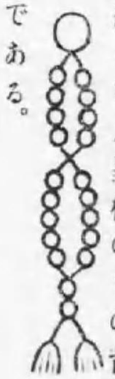
四國靈蹟は六十一番、伊豫國周桑郡小松町香園寺に奉安する、子供を抱ける異樣の大師像である。

「三和讃に」息災延命且易產」

とあるより起つた新案の大師圖樣である。

大師の誓願は廣大である。その大師誓願のあるところを忖度して仕組んだところの影像であると思ふ。

香園寺の弘法大師行狀曼荼羅は、長け二尺三寸五分幅一尺三寸、行狀中に「安產祕法女人成佛」といふ普通の大師行狀圖繪に見られぬ一畫があり、大師は右手に錫杖左手に嬰兒を抱き、草履に蒲脚絆といふ異樣のもの、背には蒲の簑の樣な雨防具をつけ、念珠も達磨、緒留の弟子が



を持つて居られる頗る新圖案である。

顆數の判明せぬ異樣なもの

今すこしく弘法大師の行狀を檢討した上で構案をして貰ひたかつたような感じがするのである。

かゝる圖樣の現出流布に就て「栴檀山梵」には「平城天皇の大同年中高祖弘法大師

傳說より描寫されたる影像

四國御巡禮の折柄、當山の麓に於て一女人難產に苦しめるを見そなはし爲めに祕呪をもつて祈らせ給へば忽ち女人安產をなして嬰兒の呱々の聲はさながらに讃佛の妙音梵音と響き玉の如き男子を生めりと云ふ是事ありてより大師は當山の懇囑を容れて暫らく當寺に御在職せさせられ塔中六坊を御開基あり、○且は女人安產の事よりして永く女人の救濟を思召され、安產子育て身代り女人成佛の四大誓願を立て瑜伽勝上の祕法を傳へ置かれたれば、當山は今に至るまで一つに子安の弘法大師と稱する由來卽ち之なり」。「又子安和讃」「趣意書」のうちにも粗ぼ同樣の由來を記してゐる。

これが子安大師として世に弘布する物語である。

緣起中の年代などと大師の行狀の史實とは甚だ相違のしてゐるところも見えるのであるが奇蹟的氣霧濃厚な大師の御行狀中のことであるからしてかゝる御思想のあらせられたことは推測出來るものと思ふてよからう。

當だこの圖樣は、變形大師の尊影としても今少しく檢討した上で大師の行狀誓願にふさはしい尊影を殘して貰ひたいといふ望蜀の感がある。

而しながらこれも大師の弘誓の偉大さを世の人に知らしむるものゝ善巧方便と見て置く必要はあらう。

かくて今後は、四百四病、八萬四千の病患に對する異樣の大師が構案され簇出して種々雜多の大師が出現してくることゝ思ふが金箔のつけるにあまりのお粗末なものをつけると却つて祖師弘法大師の宏德を冒瀆することになるかも知れぬから注意する必要はあると思はれる。弘法大師敎團の宗徒に注意する必要を感じて殊に私見を附加して置くのである。

(六) 圖像考の後ちに――

已上説明の圖像は、すべて二十八種類、項を分つこと五、御遺告を中心として構案されたる圖像に九種、内證本誓を基として構圖されたるものに九種、傳説を本據として圖繪されたるものに十種、うちには現今吾等が瞻仰してゐる大師影像に強ひて名を附したるものもあるが大概は、異樣の趣興に圖案されたるものがあつて讀者は、一大師がかくの如く千變萬化してゐることに奇異の目を瞠つてゐることゝ想像するのである。

いふところの自分も、この圖像考をものして大師尊崇の信念を強める傍ら吾れながらにも亦奇異の感にうたれてゐるものである。

思ふに、如來一音演説法、衆生隨類各得解、應機分影於萬願隨緣施益於三世で、一如來の説法を衆生の機根によつて見解を異にする如く、乃至は、機根性欲に隨つて應現する如く、醫は病に應じて藥を投ずるが如く、一大師の影像も衆生の機根に隨つて隨願應化の廣大無邊なる大師誓願の有樣を遺感なく發揮してゐるものであることを如實に知ることを得たのである。

ところが大師影像が藝術文化の方面から見て如何なる位置にあるかといふことになると、隨願應化の廣大を知つたようなわけには參らないと思はれるのである。それは、大師圖影の書に見へたのは自分の知るところでは、守覺法親王の御記が古いところであるらしい。勿論、鎌倉時代頃までは、眞に大師の影像そのものゝ一鋪や二鋪は、護持保存されたのであらうが世に現今の如く弘布されたものでないことは事實だらうと思はれる。

隨つて大師尊影の最古のものは見つからぬ、護持保存されてあつたにしても世の變遷で散逸湮滅したのかは知らぬが兎も角にも現世には見當らないのは事實である。で影像畫として見て價値あるものは先づないのである、普通眞如式といはれてゐる大師像もまづ鎌倉時代以後のものらしいとのことである。よつて藝術文化の作品として見るべきものには普通大師像としては、曾だ東寺の談議本尊土佐金剛負寺八祖像中のものがあるのみである。板彫としては神護寺のものがあるのみで、異形のものとしては、高野山善集院所藏の清涼殿の大師があるのみである。そ

の他の異稱大師圖像は、まづ藝術方面から見ては、墮落であつて、密敎々團にのみ於て尊崇措かざるものであるが、これも室町時代一般藝術文化衰頽の影響をうけたものと見れば致方もないことではあるが價値のないのは遺憾である。これが鎌倉時代に於ける新思想蔚興の影響に支配されて密敎學風の權威地に墮ち、眞言敎學の衰頽を如實にこの異樣なる影像の上に示現してゐるのではなからうかと思はせる。

彼の彌陀來迎圖は、淨土藝術の總合作品として推賞され、赤不動明王は密敎藝術の優秀作品としてもてはやされてゐる間の事情を知つたならば如上の自分の言議は稍〻肯綮に當つてゐるように思はれる。

密敎は絕待一實の渾一體に、曼荼輪圓具足の現象を如實に深刻に表現して間隙なきことは、恰かも劍術師が竹劍一本を持して準備のかけ聲に身を構へたるの時、その身構のうちになんらの隙きを見出す能はざる如く、それが卽ち密敎々義表現の藝術でなくてはならぬと思ふ。その考へより觀る時は、御遺告中心の影像といひ、傳說本位より構圖された影像といひ、何れもが密敎々義表現のものでなきような感じがするのである。

啻だこの圖像考によつて觀られることは、大師の尊像につひて、畫像と木像とがある、その變遷の歷程を見ると、初めは、畫像であつたものが高雄神護寺奉安の樣な板彫の木彫となり(圖版五)終に、木彫の坐像を現出したのだらうと思はねばならぬ系統を辿つてゐることゝ、異趣異樣の大師像が現出して何れが眞の大師像であるか、何れが僞の大師尊影であるかといふ有樣に現今がなつてゐるといふ事實、今一つは、かくの如く多くの影像の現出は、應機分影於萬類、隨類施益於三世、弘法大師敎風の分布區域の廣大さを思はせ、三世貫攝施益衆生の大悲願の弘誓を偲ばせることの一大事實。

現今大師崇拜信仰の偉大なる勢力をなして敎線範圍の擴大して行きつゝある有樣は、この多樣の尊影の現出によつて立證されてゐると思はれる。

されど如來一音演說法、衆生隨類各得解、應機分影於萬類隨類施益於三世であるからして大師に於て何等の損減なきことに强き堅き信念を捧げねばならぬといふことを銘記して置く必要はある。

且つその上に考へねばならぬことは、大師影像考證上に就て時代風俗といふことを見ねばならぬといふことである。影像の裝束法衣は、現今の御衣加持法衣目錄にあるやうな衣類法具は、一切大師はお着けになつておらぬようであることに注意せねばならぬ。普通大師影像にあるところの袈裟、衣、念珠一切只今お互が日用使用してゐるものと全然異なつてゐることでこれらは、法衣法具の時代と倶に移り變つてきてゐる過程を知る好研究材料であることをも注意せねばならぬ。

敍述の順序上や、推理進論の關係上、不遜の辭を用ひて修辭上の考慮を顧みない咎があるがこれは、新發意の究理にハヤリたる瑕瑾として見遁して貰ひ。啻だこの企てが讀者に何物かを施與することができたならば新發意の仕合せである。

* * * * *

觀楓のためにと、摩尼天軸・揚柳の三山に巡拜をとげ大自然の莊嚴せられたるこの佛國土の微妙なる寰境をうちまもりつゝ……。姑射山下玉川の邊り、吉祥庵の艸廬にこれをしるす

大正十三年十一月二十八日

求法末資堯榮合掌

◎卷の末に附記することゞも……

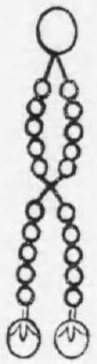
私はがらにもなく祖師の尊影より異稱の大師さまを擧げまして色々雜多のものを蒐めまして考證推斷いたして稿を終へました。このかん諸方面の辱知諸君から注意やら敎へやらをうけまして得るところもおほご座いましたことを厚くおれいを申す次第であります。

稿を終りまして聚めえたところの尊影につきまして考證のいたらぬところも多々あることに氣がつかぬではありませんが何分にも力が及ばぬのでいたしかたもありません。

啻だ圖考中の缺を補ふために、脫稿ののちに先輩諸師よりうけ得た敎から一二の訂正修補を加へておきたいと思ひます。

それは、お大師樣の念珠の相違であります。權田大僧正御所藏のものは左の通りとの御敎示を得ました『拙老所持ノ九百年前ノ妙畫八祖肖像中ノ弘法大師ノ像ハ皆水晶片親玉ノ念珠ヲ持シ袈裟ハ右角全ク搭肩ニシテ鉤紐ノヒモヲ畫キ見セザ

ル像普通ノ像ト此丈ケ別ナリ又念珠ノ弟子ハ



龍光院所藏自作爪彫大師の念珠、種蒔大師、厄除大師などは當だ今我れ〳〵お互のもつものと同樣のようであります。高雄納凉房奉安のものは、弟子は、達磨のかたは普通で緒留の弟子に

となつてゐます、祕鍵大師は、瑪瑙珠で緒留は普通、達磨の弟子は最後のとめに半獨鈷半三鈷のものをつけてゐる。

本願大師の念珠は、水晶と瑪瑙か赤珊瑚かにて、達磨は

緒留は

赤紐を以て貫攝してゐます、袈裟の搭肩は鈎紐が

になつてゐます。

水瓶は椅子の向つて左方に口を左方に、鞄は椅子の前面に頭先右方にむけて置かれてゐまして形も尊像によつて異なつてゐます。本願大師と同樣のお屐は高雄のものは同樣であります、龍光院所藏源仁自筆と稱する八祖大師中の弘法大師のおくつは又かはつてゐるのであります、水瓶のかたちも色々かわつてゐます。神呪寺の木像は天長七年三月十八日、大師如意尼のために如意輪觀音を刻まれた殘木たる樸木櫻で自像を刻まれたといふことに傳へてゐまして長け二尺六寸、幅一尺

卷の末に附記することゝも

六寸の木像であります、(圖版五)この木像の搭肩の鈎紐も本願大師のように見うけられます。大概は袈裟の鈎紐は上記の通りでありますが品性の陶冶なき市井の衆匠によつて濫造されるようになつて尊影がハッキリせぬものとなり今日では如何はしいものが澤山あるようになつてゐます。

念珠の如きも正倉院御物にあるような時代のものとはかはつてゐるかの感じがいたします、袈裟・衣もその通りであると思はれます、袈裟・衣の色合にいたしましても香染と云ひ、檜皮色といひ、緋衣と申して諸書には異なつた記錄があります、現今高野山で毎年加持いたしてゐますのが檜皮色となつてゐますが香染といふのがおだやかで平安時代の坊さんの着けた袈裟の色のように考へられますがこれもどんな者ですか。「弘法大師謚號獻衣來由」といふ書物の四十一丁右には「元和元年御式目云延喜御宇贈賜野山大師處之御衣號檜皮色或染香衣調紫衣用赤衣然間於香衣者非密敎之棟梁有智之高祖公達者曾不可着用事」とありますのを見ても想像がつくわけであります。袈裟衣の色合につきましてはこのほか「平家物語第十卷には檜皮色「南山記」には檜皮色御裝束一襲「弘法大師謚號獻衣來由」には檜皮色御衣一襲、「神皇正統記」には只だ法服とありますようで諸書まち〳〵でありますので注意し檢討することがらが多いのであります。

このほかに考へてみねばならぬことは、大師影像弘宣流布の時間的順序であります、これは私の考へでは畫像——板面半肉彫像——木彫像の變遷で弘まつてゐるのでないかと窺はれるのであります、空間的には、弘く流布されて種々相に顯現したことゝ考へられます。又畫面はたいてい横向の線に畫かれてありまして御頭の曲線あたりの特長は、骨相學上より見まして大師樣の諸藝通達見諦の大阿闍梨耶として發達せる有樣を骨相の上よりも畫き出されてゐるのみでないかとのようにも思はれてゐるのでありますが如何なものでせうか。それやこれやと彼れ是れ考へてみますと隨分と尊影の問題からして考へさせられるものが多くありまして研究すべき餘地は澤山に殘つてゐる譯であります。

一、袈裟・衣の變遷。

一、色合の鹽梅。

一、法具類、草鞋や椅子や水瓶など寧樂朝より平安朝にかけていまだ密敎の完

成されない時に如何なるものが用ゐられてゐたか正倉院御物あたりと比較して實際大師時代の法具と云ものは相承されてゐるかどうかの問題。

一、念珠の變遷展化のことがら――これも正倉院御物にある二十連計りの念珠と照し合はして考へて見る必要があらう、

一、衣類問題服裝卽ち大師尊影は、お互のような衣服は袈裟衣の下におつけになつておられぬようで故實の己達の方の敎へによるとギシをおつけになつてゐるのだとのことであるがこの邊もどうか。

とかぞえ擧げると澤山になるのであります。

かゝることは一朝一夕ではなしとげらるべきものではありません。その時代の風俗習慣の歷史的事象をも考へてみねばなりませぬから……。かうしてみますと大師尊影圖考の研究も一片の邊陲をあさつたに過ぎないようなものでありまして赦顏のいたりでありますが他日の大成に讓ることゝいたしましてこの考の補足として卷末に一言を附したわけであります。讀者で諒恕を賜はらば幸であります。

弘法大師影像圖考

定價金參圓

大正十四年二月二十六日印刷
大正十四年三月一日發行

不許複製

著者　水原堯榮
發行者　高島米峰　東京市小石川區原町六番地
印刷者　柴山則常　東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　合資會社杏林舍　東京市本郷區駒込林町百七十二番地

發行所　東京市小石川區原町六番地
電話小石川一一二八番
振替口座東京一五六八六番

丙午出版社

大僧正　權田雷斧師述
兩部曼荼羅通解
（插圖十八葉）
定價金貳圓
郵稅金八錢

大僧正　權田雷斧師著
密教綱要
定價金貳圓
郵稅金八錢

大僧正　權田雷斧師著
眞言密教法具便覽
（插圖百五十種）
定價金參圓
郵稅金十錢

小野玄妙先生著
健駄邏の佛教美術
定價金參圓
送料金十二錢

小野玄妙先生著
極東の三大藝術
定價二圓五十錢
送料十二錢

兩部曼荼羅は密教の根本思想とその實踐の理想となる圖畫に託して顯示したるものにして密教の骨髓眞言の極致佛教の精華これを外神祕にも秘して衆人の目に觸るべからざるなり然るに斯教由來口訣を重じ面授を尚びこれを容易に許さず學者顏るこれを堅くす於此乎昨秋鎗門外の窺窩なる遺憾と切に今日にそ阿闍梨權田僧正を請じて曼荼羅の開講を請ひ傳を受るの光榮を得たり

本書は東京帝國大學に於ける最初の公開講座の講錄なり、夫の、密教流傳の系統、東京密台密の異同、顯密二教の比較、護摩、六大四曼三密の祕釋、即身成佛の作法、深義、密野澤十二流の分派、灌頂の敎相、加持祈禱及び阿字觀等の說、凡て密敎の事相と眞言祕密の大體とを細かに說かんとす淺深堂々たり、そなしく此の如くこれに加へむや

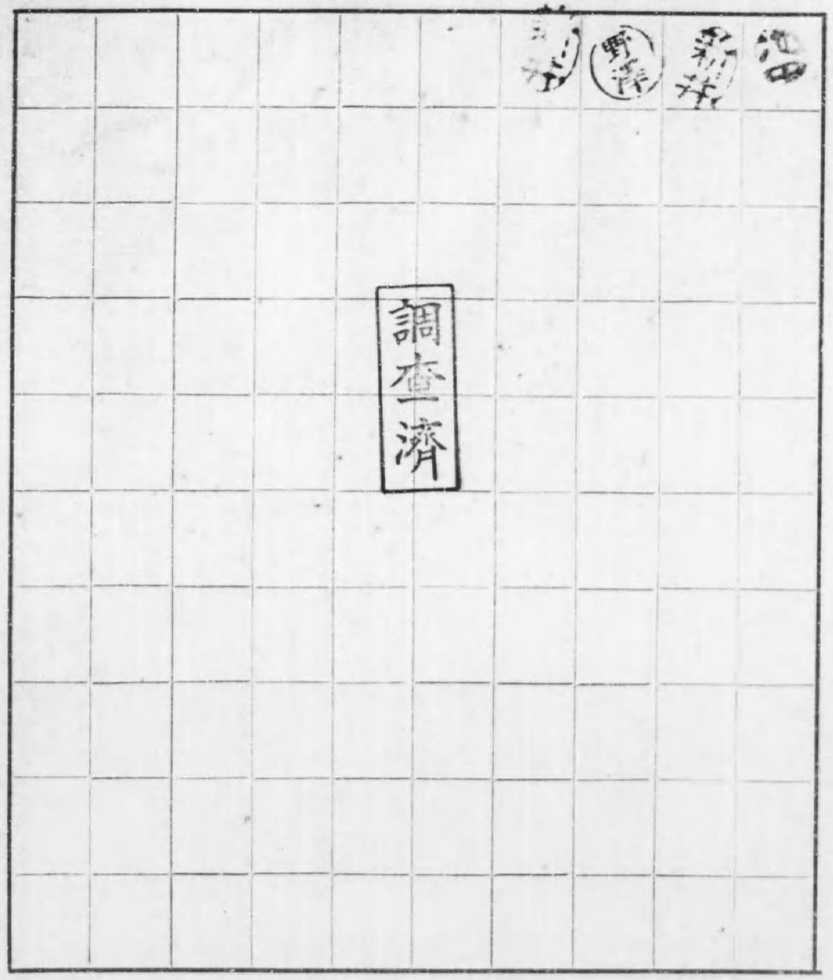
權田僧正の實踐の理想となる心會し體得することは出來たが尚數多きの說を缺けるため甚だ徹底しないところがあつた今又僧止は本經儀軌を涉獵して典據を確め畫家に命じて圖を製せしめ百五十餘種の法具の形狀を一目の下に瞭然たらしめ千古祕密の寶庫もこゝに全く開放し由來と用法とを明かにしまつた世の密敎の愛翫者は必ずこの書について學ばなければならぬ

密敎の研究家及び佛敎美術の愛翫者は必ず健駄邏に生長したる彫刻は主として佛傳及び佛敎的物語を題材としたるものにして印度唯一の美術作品として殊に支那蒙古朝鮮及び日本に於ける佛敎美術の母胎として大功を樹つ苟も未だ健駄邏の美術を學ばずして佛敎美術を談ずるは恰も米を知らずして飯を說かんとするの愚にも似たらずや（コロタイプ三十圖）

極東の三大藝術とは何ぞや曰はく支那雲崗の石窟寺曰はく朝鮮吐含山の釋迦佛曰はく法隆寺金堂の壁畫卽ち是なり其の結構の端嚴の手法の妙實に千古に卓絕せる大陸系統の代表作となす著者は我が將來の藝術が嘗然彫塑工造規範畫壁と共に一般美術家の反省を促さんとの企てたるものなり歷史を明にし遺跡を敍し信仰を說き述精詳を盡して新に發見する所尠からず（コロタイプ二十二圖）

511
83

14年6月5日



終